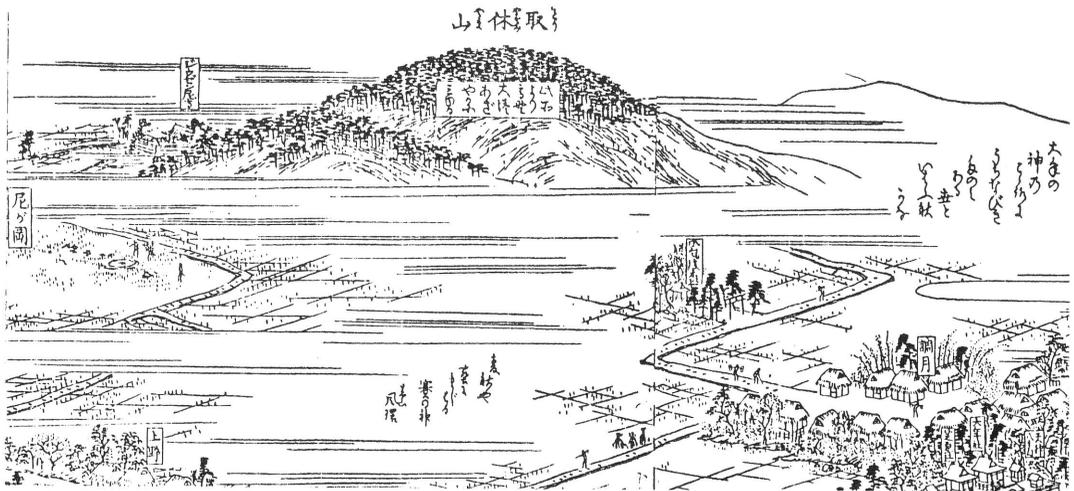


那賀郡桃山町最上所在

# 最上廃寺発掘調査概報 I



(紀伊名所図繪)

1981. 3

和歌山県教育委員会

社団法人

和歌山県文化財研究会

## 序

文化財は国民の共有財産であり、あらゆる地域に存在し、そのすべてが個有の価値をもって個性豊かな郷土の風土を形成しています。

文化財に対して徐々にではありますが理解が深められている反面、大規模な開発等によって祖先の長い年月を経て築きあげられた足跡は一瞬にして破壊されているのも実状であります。

和歌山県教育委員会では文化財保護の立場から国庫補助をうけて「重要遺跡範囲確認調査」を昭和48年から実施し、現在まで国分寺、西国分廃寺、佐野廃寺そして最上廃寺と保存を前提とした調査を行ってきました。

ここに昭和55年度の最上廃寺発掘調査概報を作成し広く一般の活用に資したいと存じます。

昭和56年 3 月31日

和歌山県教育委員会

教育長 高 橋 正 司

## 例 言

1. 本書は、和歌山県教育委員会が昭和55年度国庫補助金をうけて発掘調査を行なった那賀郡桃山町最上に所在する最上廃寺の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は和歌山県教育委員会が社団法人和歌山県文化財研究会に委託し、最上廃寺発掘調査委員会の指導のもと、文化財課技師藤井保夫、社団法人和歌山県文化財研究会技術員富加見泰彦が担当した。
3. 本書の作成には、和歌山県文化財保護審議委員の指導、文化財課技師、社団法人和歌山県文化財研究会技術員諸氏の助言・協力を得て富加見が担当した。また大岡康之、楓裕史両君の協力を得た。

## 目 次

序

例 言

第1章 調査のいきさつ .....	(1)
第2章 位置と環境 .....	(1)
第3章 調査の方法 .....	(3)
第4章 遺構 .....	(4)
第5章 遺物 .....	(5)
第6章 まとめ .....	(13)

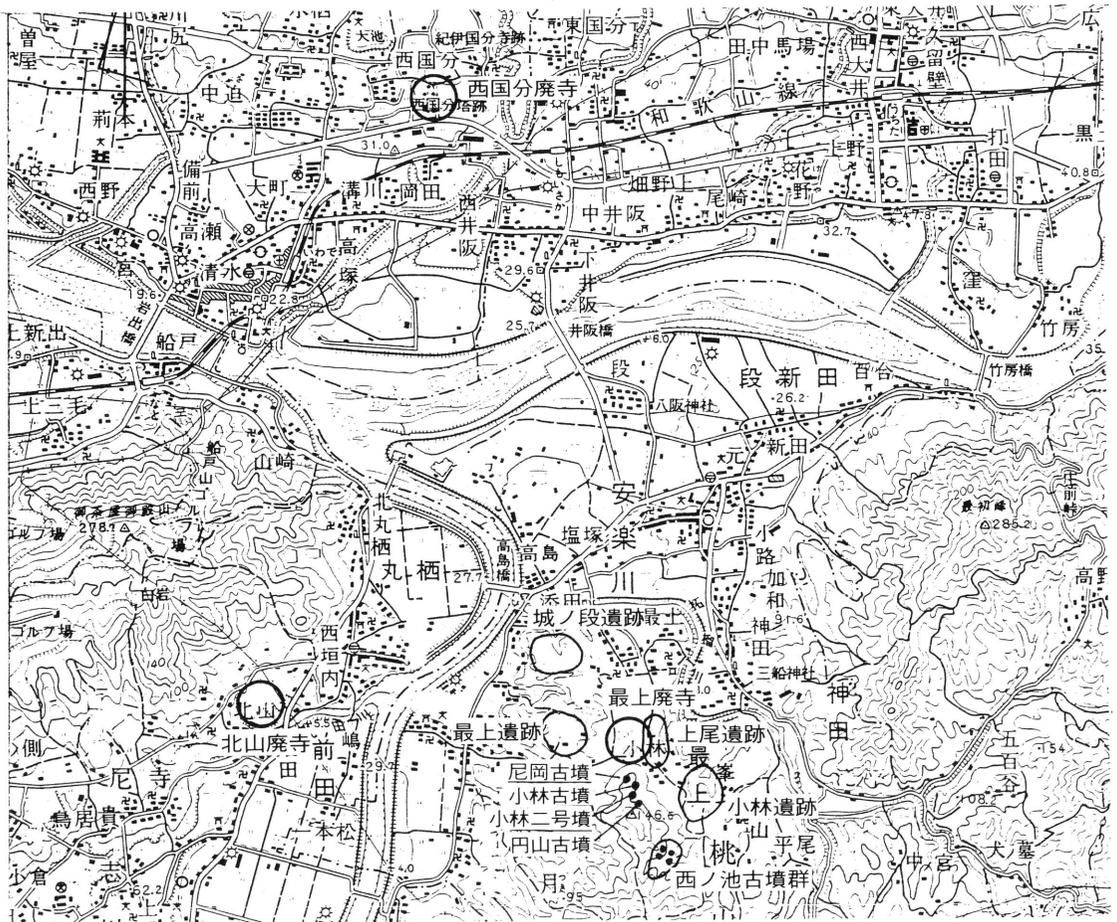
## 第1章 調査のいきさつ

那賀郡桃山町最上に所在する最上廃寺は、白鳳時代に建立された県下でも古い時期に属する寺院の一つである。古代末に修禪尼（美福門院）が鳥羽上皇崩御の後、当地に移り尼岡に堂塔を建立したといわれ、当廃寺を含むその周辺が推定地の一つとしても考えられている。

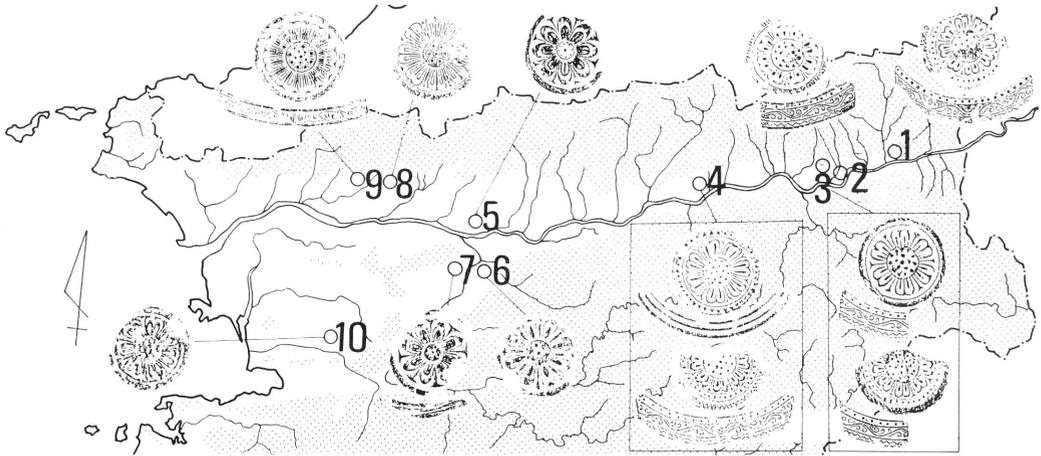
ところが、紀北から紀南へ通じる西部縦貫道路の計画路線が、当廃寺の一面を横切るものであることが明らかになってきた。この計画に対処するための基礎資料の必要性から昭和55年度より国庫補助をうけ三ヶ年の計画で伽藍配置、寺域について明らかにするための調査に着手することとなった。初年度の調査は55年11月に始まり翌年3月に終了した。

## 第2章 位置と環境（第1図、第2図、第3図）

最上廃寺は、桃山町最上字西上ノ段に所在する奈良時代の寺院址である。古瓦が周辺より出土



第1図 周辺の遺跡



第2図 紀ノ川流域の古代寺院

1. 古佐田廃寺 2. 神野々廃寺 3. 名古曾廃寺 4. 佐野廃寺 5. 西国分廃寺  
6. 最上廃寺 7. 北山廃寺 8. 山口廃寺 9. 上野廃寺 10. 葉勝寺跡

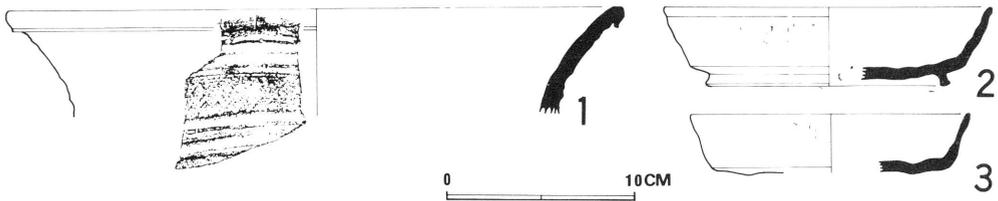
すること、塔跡基壇と心礎が現存していることからその存在は古くから知られているところである。<sup>注1</sup>

当廃寺は北側を流れる紀ノ川と、西側を流れ紀ノ川に合流する貴志川によって形成された約30mの比高差をもつ河岸段丘上に立地し、西へ緩やかな傾斜を示し、北は二本の深い浸蝕谷が入りこみ、南は取休山の山裾が近接している地理的制約の中で造営されたものである。

しかしながら、周辺地域は生活の場としては最適であったためか、縄文時代より絶えることなく生活の場が営まれている。

縄文時代の遺跡としては取休山東麓の段丘上に石鏃等を出土する小林遺跡が位置している。弥生時代では当廃寺の東側に隣接して土器・石鏃の出土をみる上尾遺跡、北側には紀ノ川と貴志川をみおろすかのようにいわゆる高地性集落としての性格をもつ城ノ段遺跡が位置する。古墳時代では今のところ集落跡とみられる遺跡は発見されていないが、取休山の北側緩斜面には尼ヶ岡古墳と呼ばれる円墳、東側斜面には径11mを測る小林古墳と呼ばれる円墳、隣接して同二号墳、さらに東南麓にあたる西ノ池周辺には4基の円墳からなる西ノ池古墳群が位置している。

奈良時代に至ると前記の城ノ段遺跡や当廃寺西側の二本の深い浸蝕谷に囲まれた台地上に最上



第3図 周辺地区出土遺物

1. 2 城ノ段遺跡 2 最上遺跡

遺跡が位置し遺物の広い分布範囲を示している。

平安時代になるとその末期に『修禪尼（美福門院）』がこの地に移り堂塔を建立したといわれ、<sup>注2</sup>所在については今のところ推測の域を出ないが当廃寺周辺、城ノ段遺跡周辺、上尾遺跡周辺からは当時の瓦片、土器片が出土している。以上のことから台地上全てが遺跡であるといっても決して過言ではない状況である。

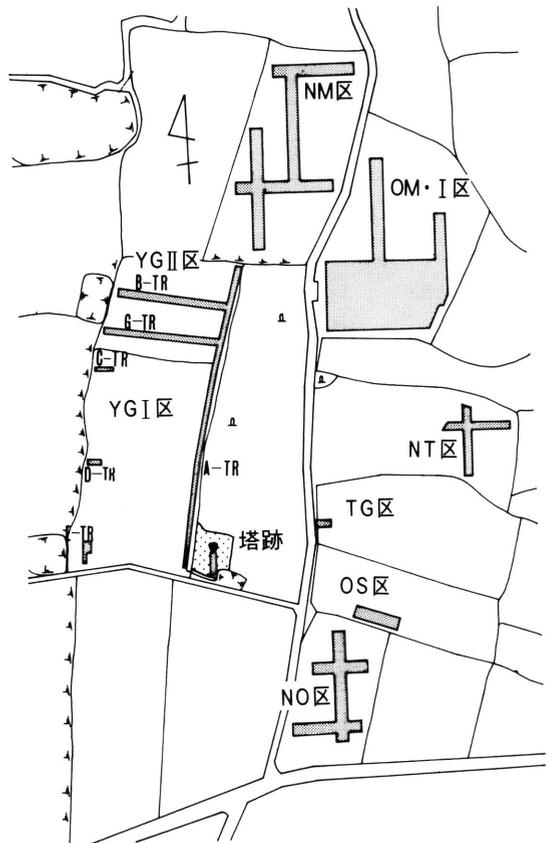
ところで、紀ノ川流域における白鳳時代の寺院址はその大半が紀ノ川北岸すなわち南海道沿いに展開されたものである。奈良県との境にあたる伊都郡内には古佐田廃寺（第2図-1）、<sup>注3</sup>神野々廃寺（同-2）、<sup>注4</sup>名古曾廃寺（同-3）、<sup>注5</sup>佐野廃寺（同-4）が位置している。『日本書紀』考徳天皇大化二年の条にみられる『南自 - 紀伊兄山 - 以来為（略）畿内国 -』の畿内への玄関口ともいべき位置に所在しており、四廃寺とも藤原宮式軒瓦を有するという共通の特徴を持っている。那賀郡では当廃寺と、紀ノ川をはさんで北岸に西国分廃寺（同-5）、<sup>注7</sup>貴志川をはさんで西岸に北山廃寺（同-6）<sup>注8</sup>が位置し、これら三廃寺は共通点の多い単弁軒丸瓦を有するという特徴を持っている。

また和歌山市にいたると山口廃寺（同-8）<sup>注9</sup>および東西両塔を備え薬師寺式伽藍配置を示す上野廃寺（同-9）<sup>注10</sup>が位置し出土する軒丸瓦は西国分廃寺の複弁蓮花文軒丸瓦と共通点が見られ、<sup>注11</sup>薬勝寺跡（同-10）出土の軒丸瓦は佐野廃寺創建瓦である川原寺式軒丸瓦と酷似していること等から、紀ノ川流域に展開された諸寺院は互いに密接な関係をもって成立していたことが理解できよう。

### 第3章 調査の方法（第4図）

塔跡基壇以外の伽藍遺構および寺域について全く不明であったため、主要伽藍の確認および寺域の確認に今年度の重点を置き調査を行なうこととした。

現存している塔心礎は原位置を保っていると考えられたので、心礎を調査の原点とし真北に沿って割付を行なった。方位はN・S・



第4図 調査地区

E・Wであらわしそれに続く数字は心礎からの距離を示すようにした。

調査は原則として割付に沿って幅3mのトレンチを設定し、遺構が確認された場合は拡張して調査を行なうこととした。しかし、調査区に収獲樹等がある場合にはそのトレンチの設定は状況にあわせ任意とならざるをえなかった。

調査はNO区、OS区、TG区、NT区、OM-I区、NM区、YG-I・II区、KZ（塔跡）区について実施した。

## 第4章 遺 構

**塔跡の調査**（第5図、図版2、3、4上）塔跡の基壇と心礎が最上共同墓地の南西隅に東西12m、南北9mの規模をもって現存している。心礎は地表に露呈している部分の規模で東西1.8m、南北2.2mを測る。石材は結晶片岩の自然石を用い、中央部には径85cm、深さ5cmに掘りくぼめられた円形柱座が設けられ、その中央には径18cm、深さ15cmの舍利孔が穿たれている。

塔跡の調査は基壇上が現在墓地として利用されているため、全面調査することが不可能でそのためトレンチによる部分調査にとどまった。トレンチは割付線に沿って心礎から南に向って設定し基壇を断割って調査を行なった。

その結果、基壇を構成するにあたっては赤黄色を呈する地山に、瓦片を混入した灰褐色粘質土で整地を行ない、黄色粘質土と灰茶色砂礫土を交互に叩きしめる版築によって堅固に基礎をきずいている。一層の厚さは3～5cm程度である。心礎は掘方の痕跡が認められないことから、版築作業中に据えられ、再び互層に版築し所定の高さまで築きあげていると考えられる。

塔基壇の規模については確証を得るには至らなかった。しかし、YG-I区に設定したAトレンチにおいて心礎から西7.5mの位置に、南北に延びるわずかばかりの段を検出し、同トレンチの土層断面の観察によっても心礎から北7.5mにあたる位置に溝状遺構を確認した。仮に段と溝状遺構が同一のものであるとするならば一辺15mを測る基壇に付属する遺構と考えられる。そうした場合、この遺構の性格については規模・検出状況等から推測して基壇の雨落ちとするより、むしろ基壇を取りまく犬走りの外周溝の痕跡とも考えられるのではないか。

ところで四天柱礎、側柱礎については完全に消失していると考えられたが心礎より北東4.5mの位置に1.4×1.2mで中央部に整形痕の残る結晶片岩の自然石を検出した。原位置を保っていると考えられるが、位置から考えて再考を要する。

**各地区の調査**（第6図、図版4下～図版7） YG-I、II区は八朔畑であるためトレンチの設定は任意とならざるを得なかった。トレンチは計6本設定し、そのうちA、B、C、D、Gトレンチで遺構を検出した。Aトレンチでは前記の溝状遺構、東西に延びる浅い溝、瓦溜りの一部を検出した。BトレンチではAトレンチの延長にあたる東西に延びる地山の整形痕とそれに平行す

る瓦溜りを検出、また、方形の掘方をもち柱間寸法 1.6m を測る掘立柱列（建物？）を検出した。C トレンチ（図版 4 下）では柱間寸法 1.5m を測る掘立柱列（建物？）と浅い溝を検出した。G トレンチでは四間分の掘立柱列（建物？）を検出した。一辺 0.7m 前後の掘方をもち柱間寸法は約 2.2m である。また平安時代に位置する柱穴も検出している。D トレンチでは方形の掘立柱掘方を検出している。

OM-I 区 N60、E45 に沿って直交する幅 3m のトレンチを設定した。地山は南側で浅く耕土下 30cm、北に従って深くなり 1.2m を測る。トレンチによる調査で掘立柱列を検出したため拡張して調査を行なった。その結果、検出した遺構は大半が南側に集中し、掘立柱建物跡 3 棟、溝 5 条、土壇 1 基、その他に時期不明の柱穴群である。

**S B-1** 桁行二間（2.6m）、梁行二間（2.6m）の南北に棟をもつ掘立柱建物である。方位は真北より 10° 程度東に振れている。柱間寸法は桁行 1.3m 等間、梁行 1.2m 1.4m である。柱掘方は一辺 0.3～0.4m の方形を呈し、深さは 0.1m、柱痕跡の径は 0.12m を測る。

**S B-2** S B-1 の北東に隣接している。桁行二間（3.5m）、梁行二間（3m）の東西に棟をもつ掘立柱建物跡である。方位は真北より 4° 程度東に振れている。柱間方法は桁行 1.75m 等間、梁行 1.5m 等間である。柱掘方は 0.6×0.5m の長方形を呈し、深さは約 0.25m、柱痕跡の径は約 0.25m を測る。

**S B-3** S B-2 に隣接している。桁行二間（3.4m）、梁行二間（2.7m）の東西に棟をもつ掘立柱建物跡で、総柱である。方位は真北より 10° 程度東に振れている。柱間寸法は桁行 1.7m 等間、梁行は 1.35m 等間である。柱掘方は 0.5～0.7×0.5m の方形ないし長方形を呈し、深さは約 0.25m、柱痕跡の径は 0.2～0.25m を測る。

NM 区 時期不明の東西に延びる幅 0.7m、深さ約 0.3m の溝と 0.9×0.9m の規模をもつ柱掘方を検出した。また、谷状を示す旧地形を検出した。

NT 区 調査範囲が限られていたため、一部分しか調査できなかった。調査の範囲内では遺構・遺物は検出できなかった。

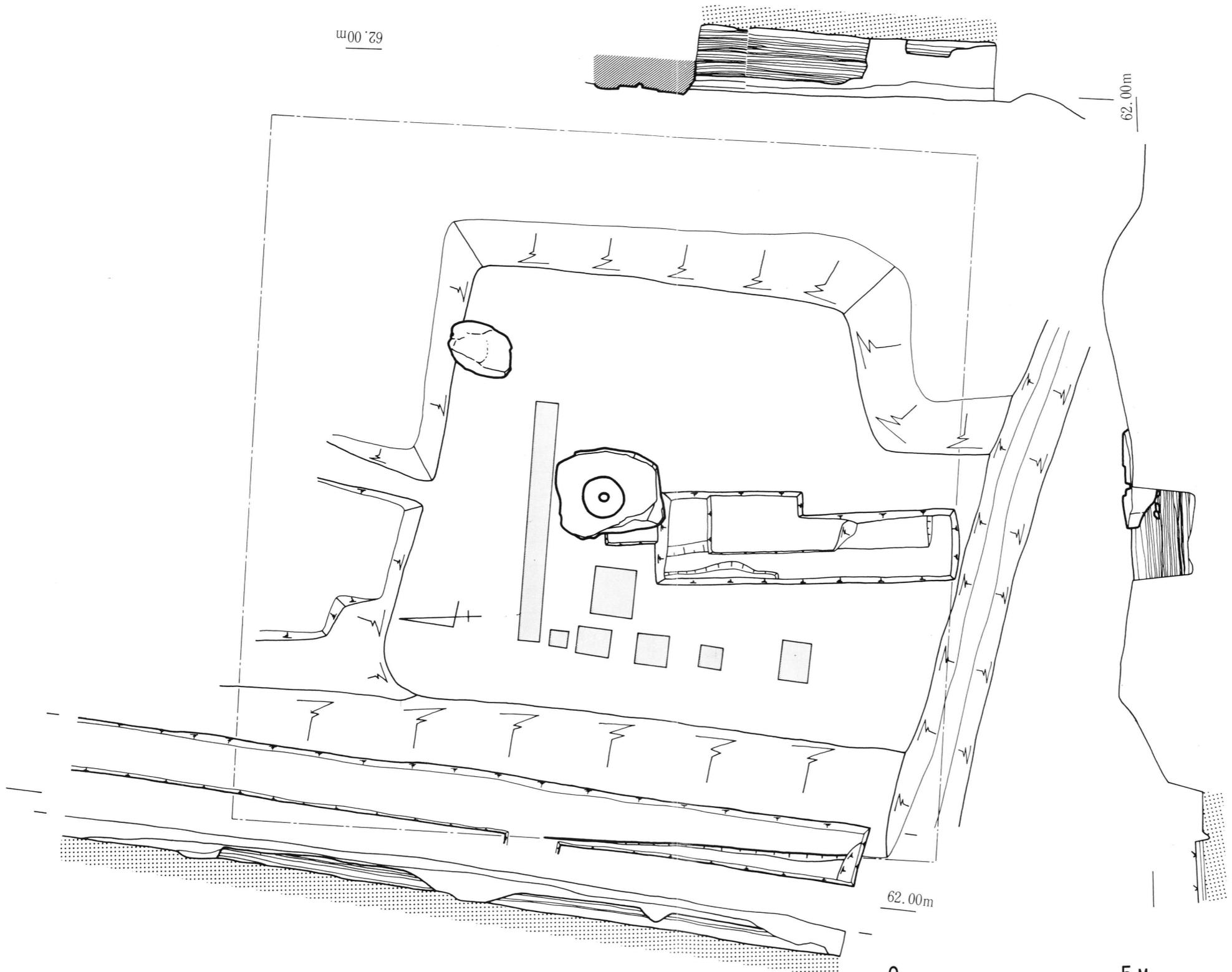
TG 区 調査の範囲内では遺構は検出できなかった。遺物は瓦片が出土した。

OS 区 調査の範囲内では遺構・遺物は検出できなかった。

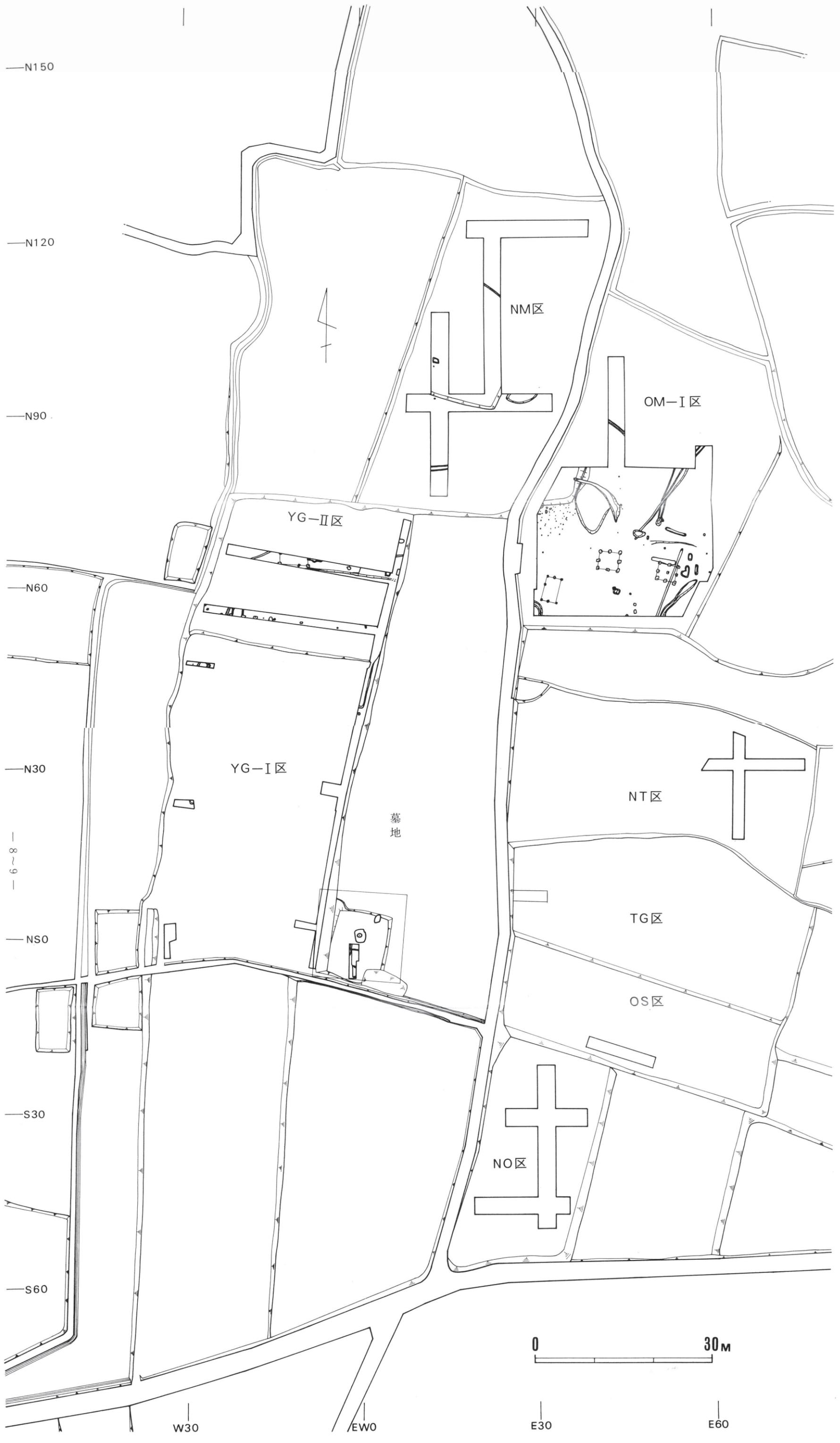
NO 区 三本のトレンチを設定したが、遺構・遺物は検出できなかった。現在の整地以前の旧地形を検出したにすぎない。

## 第 5 章 遺 物（第 7 図、図版 8、10）

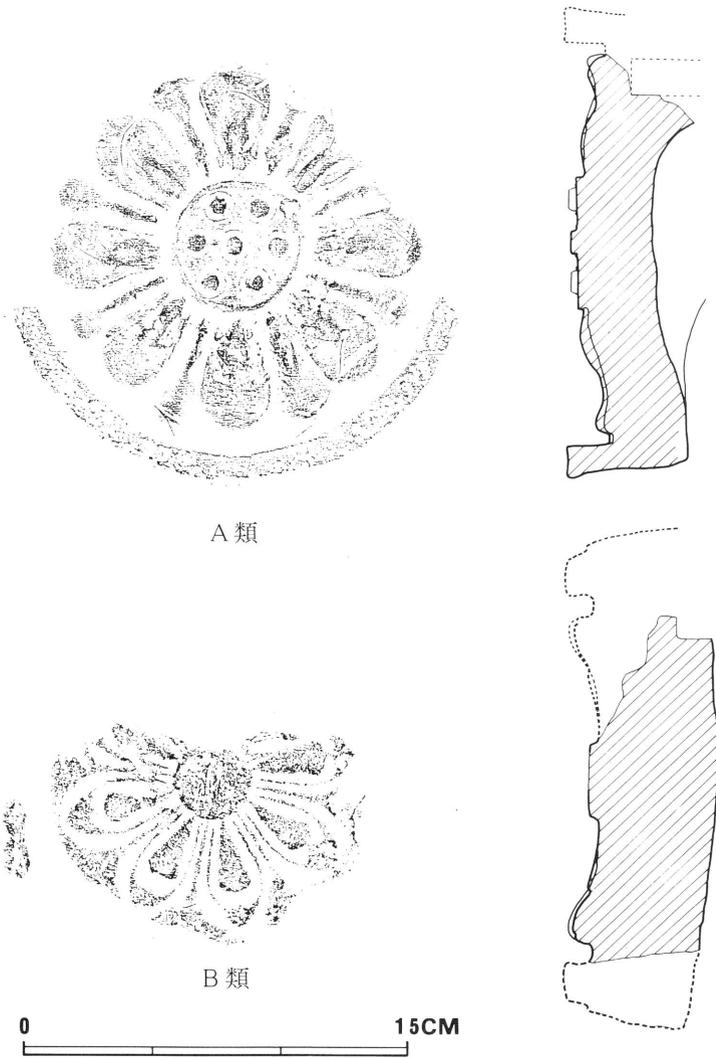
**A、瓦** 今年度の調査で出土した瓦はすべて白鳳時代のものでそれ以後の瓦については検出されていない。



第 5 図 塔 跡 実 測 図



第 6 図 最上廃寺遺構配置図



第7図 出土遺物(1)

軒丸瓦(第7図、図版8上・中) 二種類の軒丸瓦を検出した。以下A、B類とする。

A類 灰褐色を呈している。8葉からなる単弁蓮花文軒丸瓦で瓦当の直径18.2cm、中房径5.1cm、1+6の連子を持ち、弁幅3cm、周縁幅1.2cm、高さ1.8cmで素文である。丸瓦を深く接合し、内面に厚く粘土をあて、指頭によって接合させている。胎土は精緻で結晶片岩、石英、長石を含む。

B類 暗茶褐色を呈している。8葉からなる単弁蓮花文軒丸瓦で、花卉中にやや大型の子葉をもつ。瓦当の直径16.8cm、中房径3cm、連子数は不明、弁幅2.2cm、子葉幅1.3cm、周縁幅1.6cm、高さ1cmで素文である。瓦当内面に粘土をあてて接合している。胎土は精緻で結晶片岩、石英、長石を含むが、A類とは若干異なる胎土である。

軒平瓦 検出には至らなかった。過去の表採資料においても軒平瓦の採集品はない。

丸瓦・平瓦 丸瓦については全長、幅について知るための資料が皆無である。丸瓦は行基葺のものが多く、玉縁付の瓦は非常に少ない。平瓦についても全長を知るための資料は皆無であるが、幅のわかる資料は二、三例あり、最小24cm～最大27cmである。模骨の幅は約4cmで6列観察できる。また凸面に残された叩き目文様から8類に分類できる。(図版9)

**B、埴仏** (第8図、図版8下) 残長縦3.6cm、横5.3cmのいわゆる六尊連立埴<sup>註15</sup>仏の断片である。忍冬文による区画を作り、区画内には後に頭光と身光をもつ如来立像が置かれ、頭上には蓮花形の天蓋がかかっている。

**C、土器類** (第9図、図版10) 奈良時代の土師器・須恵器の出土は非常に少ない。これは調査地点の性格によるものかと考えられる。

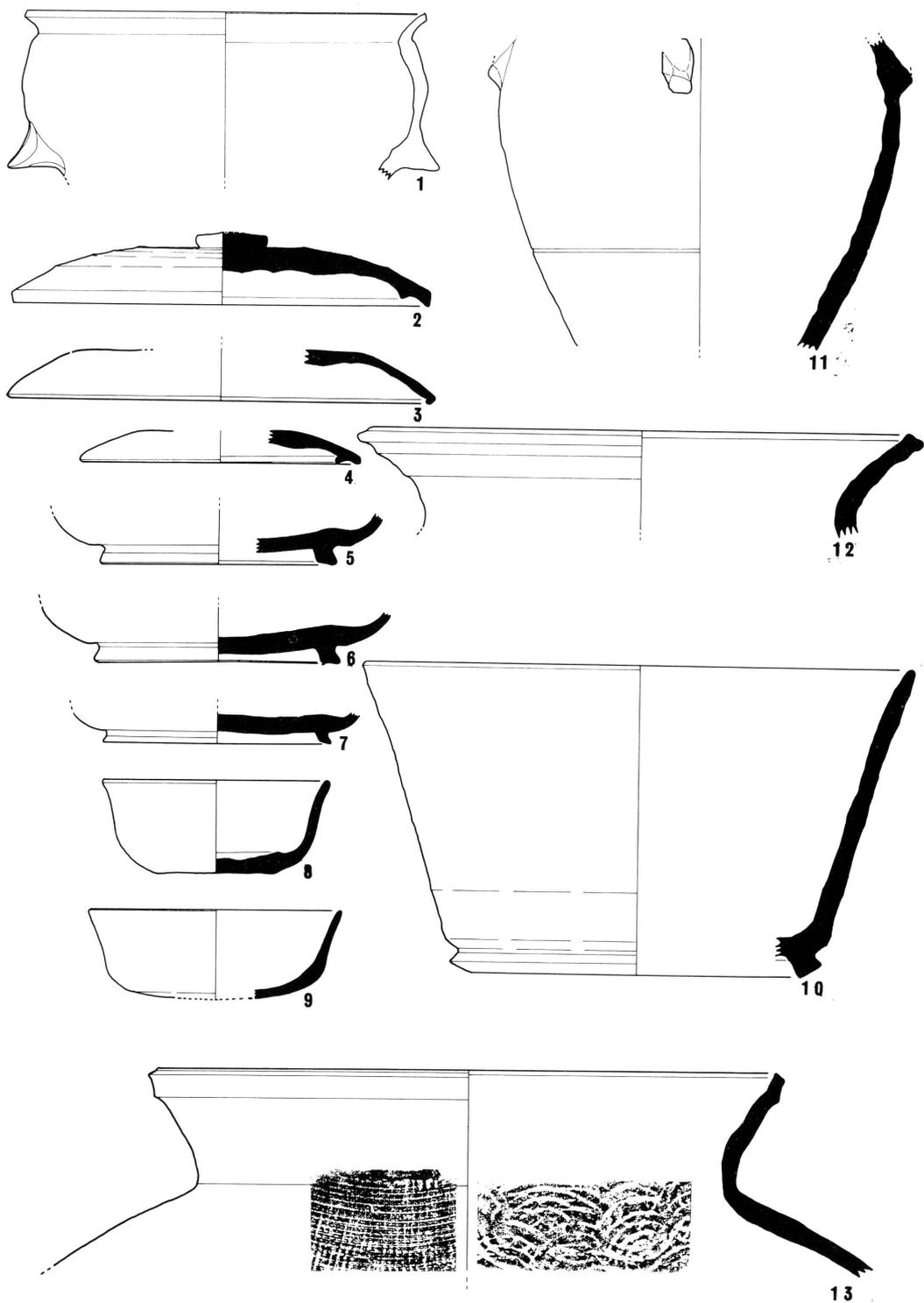
土師器 (1) の鍋の破片がある。色調は暗褐色を呈す。調整は内外面とも剝離のため不詳。焼成はやや軟かく、胎土中に微砂を含む。

須恵器杯蓋 (2) は、径18.5cm、色調は青灰色を呈す。胎土中に微砂を含む。つまみは擬似宝珠様で、天井部は平らで回転ヘラ削り調整がなされている。(3) は復元径19cm、色調は青灰色を呈す。胎土中に微砂を含む。天井部は回斬ヘラ削り調整がなされている。(4) は復元径12.4cm、色調は灰色を呈す。胎土中に微砂を含む。天井部は回転ヘラ削り調整がなされている。

杯身 (5) 色調が青灰色を呈す。底部の形状は平らであるが、中央部でやや下がっている。底部端よりやや内側に八の字に貼付高台が付けられている。焼成は良好で胎土中に砂粒を含む。(6) 色調が灰色を呈す。底部の形状は(5)と同様中央部でやや下がっている。底部端よりやや内側に八の字に貼付高台が付けられている。焼成は良好で胎土中に砂粒を含む。(7) 色調は青灰色を呈す。底部の形状は平らであるが、中央部でやや高くなっている。底部外面は指押かえの凹凸がなはだしい。底部端よりやや内側に八の字に貼付高台が付けられている。焼成は良好で胎土中に砂粒を含む。(8) 口縁部径10.2cm、器高4.2cmを測る。色調は青灰色を呈す。口縁部は外湾ぎみに立上り、端部は丸く仕上げられている。調整は回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切りによる。焼成は良好で胎土中に砂粒を含む。(9) 口縁部径11.2cmを測る。色調は暗青灰色を呈す。口縁部は外湾ぎみに立上り、端部は丸く仕上げられている。調整は回転ナデで、底部は回転ヘラ切りによる。焼成は、不良で軟質である。(12) 口縁部径25.0cm、器高14.0cmを測る。色調は暗灰色を呈す。口縁部はわずかに外反するが、ほぼ直線的に上方へ延び、端部は丸く仕上げられている。口縁下方 $\frac{1}{4}$ は回転ヘラ削りがなされている。底部の形状は平らで、八の字に貼付高台が付けられている。焼成は良好で砂粒を含む。

壺 (10) 把手付の壺で、肩部付近に最大径を測る。色調は青灰色を呈す。調整は丁寧で、器面は内外とも回転ナデ調整による。焼成は良好で胎土中に微砂を含む。

甕 (11) 復元径25.5cmを測る。色調は青灰色を呈す。口縁部は外反して立ち上がり、端部でやや内傾する。焼成は良好で胎土中に5mm大の石英、長石を含む。(13) 復元径28.0cmを測る。色



第8図 出土遺物(2)

0 15CM

調は青灰色を呈す。口頸部は外反して立ち上がり、口縁部は外反して上方へ延びた後内傾し、端部は鋭い。頸部外面は平行叩きの後、カキ目による調整がなされている。内面には同心円叩きが見られる。焼成は良好で胎土中に砂粒を含む。

## 第6章 ま と め

今年度の調査は、三ヶ年事業の初年度でもあることから方針としてまず主要伽藍の確認および寺域の確認にその重点をおいたが、調査の限定から当初の目的は十分達成できたとはいえない。

しかし、調査の結果明らかにされた点も少なくない。

**塔跡** 塔基壇の方位が外周溝の痕跡から真北より5°余り東に振れていると考えられること。基壇は構成される際、掘込み地業は行なわれず多量の瓦片の泥入する灰褐色粘質土で整地し版築を行なっていること。また、塔基壇下層（整地土）から瓦片が多量に出土するということから、塔建立に先だって金堂が建立されている可能性が考えられる。<sup>#12</sup>

**その他の遺構** YG-II区Bトレンチで検出された地山の整形痕と瓦溜りは、これらの方向が塔基壇の方向とほぼ直交し、塔心礎から北へ60mつまりほぼ200尺の位置にあたることから、講堂の北面基壇縁、あるいは寺域を示す築地跡、溝跡等の痕跡とも考えられるが確証は得られなかった。OM-I区では三棟の掘立柱建物跡が検出されたが、このうち南北方向に棟をもつ三間×二間の掘立柱建物跡について、前記の地山の整形痕と瓦溜りが講堂北面雨落ちであるとすれば奈良時代伽藍の鐘楼、経蔵は三間×二間がその標準であるといわれるところから鐘楼・経蔵としての可能性も考えられる。<sup>#13</sup>

**寺域** 東限については、調査の結果、これを明らかにするには至らなかった。西限については塔跡より西約30mの地点では、南北に沿って1.5mの比高をもって一段低くなっており、また紀伊続風土記、紀伊名所図会等によるとこの段が村の境界として記されていることから、そのみで西限を決定するのはかなり危険であるが、寺域の一部を考える一資料となるであろう。南限については今のところ全く不明である。しかし塔跡より南約60mには取休山の山裾がせまっていることからそれより内側と考えられる。北限についてはYG-II区で検出した地山整形痕あるいはNM区で検出した東西に延びる溝もこの位置が塔跡より81m(270尺)にあたり、これより北は谷状地形を呈していることから、この位置であることも考えられる。以上のような調査結果と地理的制約から考えて、当時の地方寺院の寺域は南北150m、東西60mの中に収まるものと考えられる。しかし、それと思われる遺構について今回の調査では検出できなかったため、今後、調査が進むにつれ再検討しなければならないところである。

**瓦** 二種類の軒丸瓦が出土したが、いずれも単弁軒丸瓦で、このうちA類が当廃寺の主流をなすものである。B類については差し替え用の瓦と考えられる。ところでこのB類に酷似する瓦が、

貴志川町北山廃寺、岩出町西国分廃寺で出土していることから、三廃寺の深い関連がうかがわれるところである。また、当廃寺出土の瓦は白鳳時代の瓦のみで、それ以後の瓦については検出されていないため当廃寺の存続年代は極めて短期間であったと考えられる。

**博仏** いわゆる六尊連立博仏で、飛鳥山田寺<sup>註14</sup>出土といわれる博仏と同范かとみられる。これと同じ六尊連立博仏は御所市朝妻廃寺<sup>註15</sup>、伊都郡かつらぎ町佐野廃寺<sup>註16</sup>でも出土し、唐招提寺三尊倚像押出仏の中段にも同形の支柱及び如来立像の姿を見ることができる。<sup>註17</sup> このことから当廃寺を含め紀ノ川流域の寺院が少なからず、大和の影響下にあったことは容易に推察できる。

**建立年代** 塔基壇調査の際に版築中より須恵器の杯蓋を検出しており、(第8図-3)、これが陶邑編年<sup>註18</sup>によると、Ⅳ型式1段階にあたり、藤原宮の終末あるいは平城宮のはじめに位置づけられるため、建立については7C末から8C初頭と考えられる。しかし、塔建立に先だって、金堂が建立されている可能性があることから、創建期については、さらに遡ることが考えられる。

今後の他の遺構についての調査に期待されるところが大である。



図版一 遺跡遠景





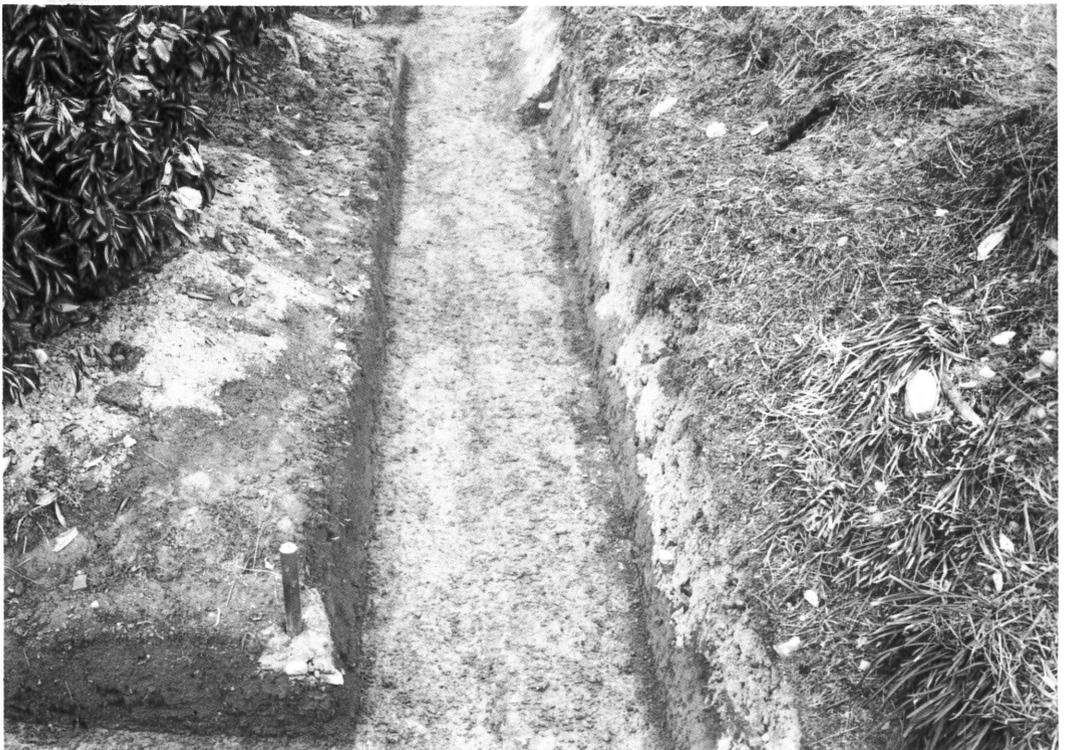
最上廃寺塔跡 (KZ区)



塔跡の調査



塔基壇の状況



塔西側基壇縁



塔北側基壇縁 断面



YG-I区 第Cトレンチ



YG-II区 第Bトレンチ



YG-II区 第Gトレンチ



OM-I区 掘立柱建物跡 (SB-1)



OM-I区 掘立柱建物跡 (SB-2、SB-3)

NM区の調査



NT区の調査



NO区の調査





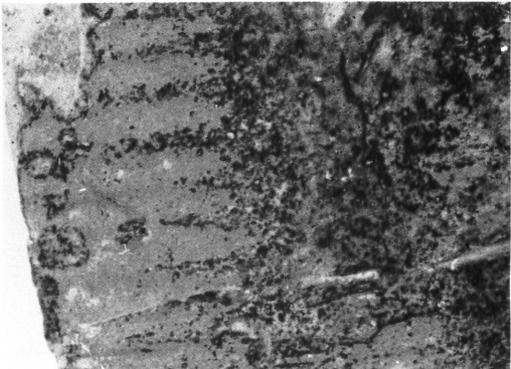
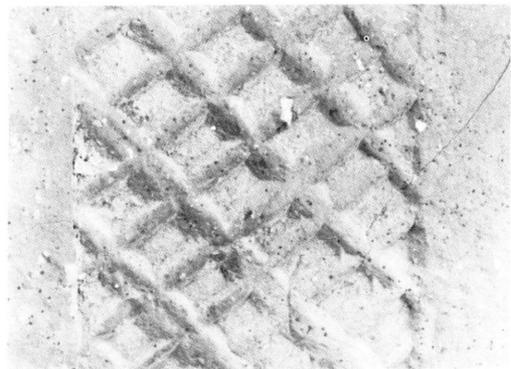
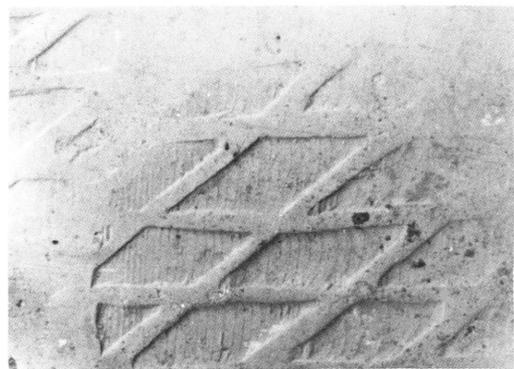
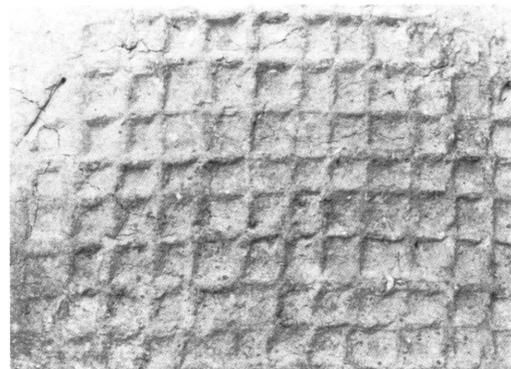
軒丸瓦 A類



軒丸瓦 B類



六尊連立博仏



平瓦 叩き目文様 (約1/4)



出土須恵器

# 調 査 組 織

## 最上廃寺発掘調査委員会

### 調査委員

羯磨 正信	和歌山県文化財保護審議会委員
巽 三郎	〃
都出比呂志	〃
藤沢 一夫	〃
竹中 一雄	桃山町文化財保護委員会委員長
仁木 正雄	桃山町教育委員会教育長
井上 至	和歌山県教育委員会文化財課長

### 調 査 員

藤井 保夫	和歌山県教育委員会文化財課技師
富加見泰彦	和歌山県文化財研究会技術員

### 事 務 局

事務局長 海野 正幸	和歌山県文化財研究会事務局長
〃 幹事 桃野 真晃	県文化財課第2係係長
〃 主事 宮本登志夫	〃 主事

昭和56年3月30日印刷

昭和56年3月31日発行

## 最上廃寺発掘調査概報 I

編集 和歌山県教育委員会文化財課

発行 和歌山県教育委員会

印刷所 邦 上 印 刷